

令和元年6月5日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16743

研究課題名(和文) 朝鮮語諸方言の形態音韻論的研究

研究課題名(英文) Morphophonological Research on Korean Dialects

研究代表者

辻野 裕紀 (TSUJINO, Yuki)

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：70636761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代朝鮮語の諸方言における形態音韻論的現象の実態を明らかにするところにある。2012年の科研費では「n挿入」を、2013年から2015年の科研費では「濃音化」を扱い、興味深い言語事実を顕現させることができたが、いずれもその対象はソウル方言であった。そこで、今回は、ソウル方言以外の方言、具体的には、大邱方言と釜山方言を対象に調査を行なった。調査項目は大邱方言では「n挿入」に絞られ、釜山方言では「n挿入」に加え、「濃音化」、「激音化」、「n-l連鎖」の発音、「uy」の発音、用言語幹末の「lk」、「lp」の発音など、揺れが予想されるものを広範に扱い、20代の話者をインフォーマントに、発音実態を仔細に調べた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

周知の通り、朝鮮語は形態音韻論的に複雑な言語であり、また各々の形態音韻論的現象についても、地域差や世代差、個人差が存在することが知られてきた。しかしながら、現象によっては、その仔細なる調査が十分には行なわれてこなかった。そこで、本研究においては、「n挿入」をはじめ、とりわけ話者の属性によって揺れが大きいと予想される現象を対象を局限し、大邱方言や釜山方言を詳細に調査した。その結果は、拙論を含む、これまでのソウル方言をめぐる先行研究と比較可能であり、現代朝鮮語の「多様性」を具体的に描き出すのに裨補するであろう。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to cast light on morphophonological phenomena observed in modern Korean dialects. While the author successfully revealed intriguing linguistic facts about n-insertion thanks to a grant-in-aid for scientific research(KAKEN) in 2012 and about <tensification> with a grant from 2013 to 2015, the target of the research was limited to the Seoul dialect on both occasions. For this reason, in this research, the author has focused on other Korean dialects, namely, the Daegu and Busan dialects. The research item was limited to n-insertion with respect to the Daegu dialect, whereas a wide range of items expected of fluctuations were examined for the Busan dialect, including n-insertion, tensification, h-aspiration, the pronunciations of the n-l chain and uy, the pronunciations of the lk and lp endings of the stem of declinable words, etc., and their actual pronunciations were researched in detail based on informants in their twenties.

研究分野：言語学

キーワード：現代朝鮮語 形態音韻論 n挿入 濃音化 若年層話者 方言

1. 研究開始当初の背景

本研究テーマは、2012年度の科学研究費(研究活動スタート支援)の研究課題で扱った n 挿入 研究、および 2013年度~2015年度の科学研究費(若手研究(B))の研究課題で扱った 濃音化 研究の承前である。

周知の通り、朝鮮語は形態音韻論的に複雑な言語であり、また各々の形態音韻論的現象についても、地域差や世代差、個人差が存在することが知られてきた。その中でも、n 挿入 と 濃音化 は話者の属性などによって揺れが大きい現象であるが、調査研究が十分に行なわれているとは言えない状況であるため、この2つを研究主題として、2012年度から2015年度にかけてフィールドワークを中心とした研究を進め、いくつもの興味深い言語事実を顕現させることができた。その成果は、『朝鮮学報』など、全国学会誌や大学紀要などによって、広く世に問うたが、その研究対象はいずれも若年層ソウル方言話者の発音に局限されていた。そこで、さらに視野を拡げ、他の方言では n 挿入 をはじめとする形態音韻論的現象の実現実態がどのようになっているのかについての興味が湧出し、本研究課題「朝鮮語諸方言の形態音韻論的研究」を遂行するに至った。

2. 研究の目的

如上の経緯を背景とし、本研究の目的は、ソウル方言以外の諸方言における、n 挿入 などの形態音韻論的現象の生起実態を闡明するところにある。

当初の予定では、全羅道方言や中国朝鮮語(とりわけ延吉の朝鮮族の朝鮮語)も研究の俎上に載せるつもりであったが、他の研究や仕事等も重なり、十分な時間を確保することができなかったため、結果的に、大邱方言と釜山方言に対象を絞ることになった。

大邱方言に関しては、n 挿入 を主たる調査項目とし、釜山方言に関しては、n 挿入 に加え、濃音化(語彙的濃音化、漢字語における流音後濃音化など)、激音化、n-l連鎖の発音、uyの発音、連用形語尾-eの発音、用言語幹末のlk、lpの発音、kkunh.ki.ta《断たれる》、tam.im《担任》など、話者による揺れが予想されるものを、広範に亘って総合的に調べ上げた(ローマ字翻字はYale式による)。

その結果は、以下にも述べるように、拙論を含む、これまでのソウル方言をめぐる先行研究とも比較可能であり、各方言の個別研究に留まらず、現代朝鮮語の多様性を具体的に描き出すのに裨補するであろう。

3. 研究の方法

研究の方法としては、調査者(辻野)が事前に準備した調査票の語彙をインフォーマントに読み上げてもらう、いわゆる読み上げ式を採った。こうした調査方法で得られる発音は、実際の日常的な発音と乖離している可能性も絶無ではないが、限られた時間内で、調査者が知りたい単語の発音を引き出し、記述を行なうには、これが最も効率のよい方法だと判じたからである。

インフォーマントは、大邱方言、釜山方言、いずれも20代の当該方言母語話者(それぞれ啓明大学校、釜慶大学校の学生さんたち)であり、インフォーマント選定にあたっては、当該地域以外に居住したことがないこと、両親も原則として当該地域出身者であることなど、条件統制を峻厳に行なった。調査は、インフォーマント1人あたり、1時間から1時間半程度かけて、丁寧に進行した。

調査語彙に関しては、『標準発音実態調査』(国立国語研究院、2003年、原文は朝鮮語)や拙論「現代朝鮮語における n 挿入 の実現実態について(1)」(『朝鮮学報』232、朝鮮学会、2014年)などを参考にして、決定した。これらの文献はすべてソウル方言の実態調査報告であるため、分析にあたり、ソウル方言との比較対象が可能となる。

4. 研究成果

研究成果に関しては、現在、分析と考察、論文化を進めているところであり、現段階では、未だはっきりとしたことはあまり言えない段階にあるが、全体的な傾向としては、案にたがい、部分的な違いはあるとはいえ、総じて見ると、ソウル方言とそこまで大きな差異はなさそうだと言っている。

ソウル方言と大邱方言，釜山方言が明らかに異なると言えそうなのは，二字漢字語における n 挿入 の発音のありようである．ソウル方言では，基本的に二字漢字語では n 挿入 が生じない．しかし，大邱方言でも釜山方言でも，kan-yem 《肝炎》，kum-yen 《禁煙》などのように，先行要素がとりわけ共鳴音の場合には，n 挿入 が起きやすい傾向がある．また，これは他の先行研究も指摘していることではあるが，kum-yo.il 《金曜日》などのように，曜日名において，先行要素が共鳴音の場合には，n 挿入 が起きやすいことが確認できた．一方，mok-yo.il 《木曜日》においては，先行要素が閉鎖音であるためか，n 挿入 が起きにくいと言えそうである．

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

辻野裕紀「現代朝鮮語の形態音韻論的現象に見られる共時的変異について」、『音声研究』21-2，日本音声学会，査読有，2017年，pp.116-126．

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：なし

6．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。